月刊
# うたらば
2019
6

今月のテーマ

## 和

令和になって約2ヶ月、浮ついた空気も次第に薄れてきましたね。今月のテーマは「和」。令和の歌が多いかと思ったら、様々な「和」が集まり、バラエティ豊かな号になったように思います。

### 和音たれただ和音たれ社会という曲から外されたくないのなら

（からすまぁ）

社会の枠からはみ出ることへの恐怖心を感じる作品です。社会にとっての不協和音は外へと弾き出される、という観念に強く囚われている主体。2句目までの固い表現は「和音」という伸びやかで美しい響きとは裏腹に、窮屈な生き方をしている印象を感じて、そのギャップにも世の中の厳しさが表れているようでした。良い生き方って何なんでしょうね。

### 噴水で遊ぶ子供の映像が流れて今日は令和元年

（たろりずむ）

上の句で書かれているシーン、ニュースではすごくお馴染みの光景ですよね。真夏日だったことを告げるニュースなどの背景でなんとなく流れている「噴水で遊ぶ子供の映像」。地面から直接水が出ている噴水などが頻出しますね。5月にしては暑い日で始まった令和の時代。その日のニュースで見たものを詠めばそのまま短歌になっているのが面白いところです。

### そのときのまっとうな青とじこめて夏の正座をしている和菓子

（久保哲也）

表紙フォト短歌にさせていただいた作品。言葉から描き出される世界が涼しげで美しく魅了されました。「まっとうな青」や「夏の正座」というやや抽象化された言葉が景色のフォーカスを甘くしていて、淡い光を生み出しているところが見事です。

### いつからかそれは僕らの法則で和風パスタはお箸で食べる

（とき）

和風とはいえパスタはパスタでイタリア料理なのに、なぜかお箸で食べさせられる。そんな暗黙のルールができてしまっていることを客観的な目で捉えて、言語化しているところに作者の力量が感じられます。良い発見のある作品。

### 安全なはずの水道水なのに中和しないと金魚を殺す

（えんどうけいこ）

いわゆるカルキ抜きってやつですね。安全だと言われる水道水は消毒のための塩素が入っていて、人間にとっては無害なものが金魚にとっては有害な成分になっている事実に気付かされます。逆に生水だと人間はお腹を壊す可能性があって、立場が変われば「最適」も変わるところに面白さがありました。

### 想像の昭和のなかの想像の音楽室にもバッハの肖像

（岩倉日）

平成生まれの人たちは昭和についてメディアを通した情報でしか知り得ません。そしてそんなフィルターを通した状態の昭和とは、音楽室にはバッハの肖像がかけられているイメージ。たしか当時は「作曲家の肖像画」が教材として国に指定されていたんですよね。遠い昔の音楽室に読者を連れて行く、ノスタルジックな一首です。

### ぷちぷちと針が奏でるノイズさえ曲の一部であったね昭和

（関根裕治）

ノスタルジーを届けるシーンの選択が絶妙な作品。レコードの針の引っ掛かりによるぷちぷちというノイズはデジタルになっ

表紙フォト短歌のカラー版やバックナンバーは公式サイトにてご覧いただけます。
作品の投稿も常に受付中！詳しくはサイトの募集要項をご確認ください。
短歌 × 写真のフリーペーパー『うたらば』公式サイト：http://www.utalover.com/

うたらば


The Monthly Utalover, June 2019

た今の時代ではもう聞くことはできなくて、当時の音楽は逆にあのノイズ込みで覚えている感覚が確かにあります。いろいろある「昭和感」の中であのレコードのノイズに着目したセンスに脱帽です。

**羽じゃなく一和と書いた子の中の鳩は太っていることだろう**

（がね）

ものを数える単位にはその対象の特徴を捉えたものが多く見られます。「和」で数えるものがあるならば「太っている」という連想が面白く、惹かれました。なごむ、とも読む漢字なのでその鳩の見栄えはぽってりとして見た人を和ませるんでしょうね。ほっこりする作品でした。

**内角の和は神さまが決めたこと寂しさをうまく飼い馴らせない**

（芍薬）

上の句と下の句のジャンプの距離感が絶妙でした。三角形の内角の和＝百八十度という定理は閉じた三角形である限り絶対に覆らないもので、人間にはもうどうしようもないこと。このどうにもならない感覚は時に自分の無力さや劣等感へとつながり、寂しさを誘発するものになる、という形で下の句にブリッジしていくのだと読みました。感情豊かな主体が印象的です。

**かなしみで飽和していて大ジョッキ生にびっしりついた水滴**

（toron*）

結露するのは空気中の水分がグラス表面で冷やされて飽和するから。「かなしみで飽和」しているなら大ジョッキ生についた水滴は全部「かなしみ」ですよね。かなしみでいっぱいのときに「大ジョッキ生」を飲んでいるところに主体にとってのお酒の役割が見えてくるようで、行間を想像するのも楽しい作品でした。

**さまざまな国の食材消化して世界平和のような胃袋**

（堀眞希）

アメリカ産のじゃがいも、オーストラリア産のお肉、モロッコ産のタコ。世界各国の食材を日本にいながらにして食べられる時代です。たくさんの国の食材が仲良く胃におさまって消化されていく様子を「世界平和」と捉えたところが素敵ですね。日本に各国の食材が流通していること自体がすでに世界平和の恩恵なのかもしれません。

**号外のように団扇が配られる駅前にいる、あついね令和**

（木村奏菜）

令和になった直後に来た暑い日の出来事でしょうか。チラシとして配布される紙の団扇が飛ぶように捌けていく様子を眺めている主体。暑さにやられたのか淡々とした言い回しの「あついね令和」。やがて冬も来る令和を「あついね」と断定できるのは始まったばかりの今しかできない表現で、その言葉の選択にハッとさせられました。

**ぼくたちのきっと最後の夏だから夕焼け空にとけてく和音**

（村崎）

とても良い叙情を持った青春詠だと感じました。「ぼくたちのきっと最後の夏だから」という上の句からは中学あるいは高校の最後の年であることが感じ取れます。友達との別れを意識し始めたなかで見上げた夕焼け空に、どこからともなく聞こえてくる和音。主体の置かれた状況から入り、視覚と聴覚で感情を浮き彫りにする。作歌のお手本のような一首です。

**感情の総和をゼロにするためにポテトチップス飲むように食む**

（袴田朱夏）

下の句の表現にインパクトがありました。マイナスの感情が蓄積していた主体。それをゼロに戻すために「ポテトチップス飲むように食む」。ただ食べるだけじゃなく「飲むように」なのがいいですね。袋を傾けて口に流し込んでいる主体の姿がコミカルで親近感を持ちました。

他には以下のような作品を採用させていただきました！

辞典には卓袱台返しと書かれおり意味は昭和の必殺技と

（衣未（みみ））

本物の昭和の店は避けられてレトロな昭和に人が集まる

（織部　壮）

少しずつ令和が馴染みはじめてる業務日誌の日付を打てば

（雨虎俊寛）

拘ってみたい日もある和からしと酢醤油で食む焼き餃子の味

（もなか）

平和とはあらそいのない世の中で青空をもつ君のことです

（香村かな）

それとない和製英語のたたずまい真似てサラリーマンをしている

（きつね）

和菓子屋のバイト募集のポスターの応募資格を凝視する猫

（ともえ夕夏）

ひとの和を何よりとうとぶ人でした「バナナもおやつに入れてあげてね」

（西村湯呑）

きみが釣る水風船はふたつとも青いわたしの浴衣と同じ

（千原こはぎ）

和ませるためには自分が和むこと日なたに座る猫に教わる

（有村　一花）

ぬくもりが恋しくなれば触れてみる和紙のはがきのあじさいの花

（阿坂れい）

モノマネのモノマネをする人を観てようやく分かる昭和のスター

（田巻由美子）

ありがとう平成おめでとう令和、あのすかすかのリセットボタン

（秋山生糸）

和を以て貴しと茄子（むらさきはいちばんえらい色ですもんね）

（西淳子）

戦争を知らない舌で味わえばコロッケは平和の味がする

（たかはしりおこ）

鶴を折る平和を祈る新しい世界に向かう漢字練習

（麻倉ゆえ）

多分アブの駆け込み乗車をした音が通勤電車の平和を乱す

（須磨蛍）

愛されていたい僕らにちょうどいい装備をください貴和製作所

（田中ましろ）

有村さん、良い気付きを貰いました！西さん、その茄子はズルいです、いい意味で！（笑）次回テーマは「信」。投稿作品を拝読するのを楽しみにしています！

**次回テーマ**

**信**

信号、信用、信奉、配信、送信、受信、信託、信用金庫、人間不信、「信」に関する短歌のご投稿、お待ちしています！

**7/6（SAT）締切**


The Monthly Utalover, June 2019